

下は「秦王飲酒」の主眼は何か。

ひとことでは「秦王」すなわち中國の世俗王に對する諷刺だろう。ただ、陳氏のいう「世  
變無涯、人生有盡」への詠嘆を排除するものではない。「世變無涯、人生有盡」すなわち諸行無  
常をさとらずに世俗の権力に固執する「秦王」への諷刺なのだ。「秦王」の對蹠存在として堯・  
舜ら中國の古聖王を掲げずに天竺の轉輪聖王を伏せておいたところが、李賀の割意であろう。  
諷刺は、言葉で人を刺す刃だ。この刃は、しかし、人を刺すとき、刃を執る主をも同時に刺す  
より正確にいえば、自らの心臓を刺し貫いた人によつてしか行使を許さない刃、たとえ行使して  
も効果を發揮しない刃だ。

「秦王」たち、秦の始皇、漢の武帝、唐の太宗……かれらを典型として過去にも以後にも無  
数に輩出し政権を握つた人たちはみな、堯舜を氣どり轉輪聖王を氣どつたが、堯舜だつたものも  
轉輪聖王だつたものもない。かれらは人民の幸福のためには立つたというが、まことはおのれの  
幸福實現に意心したのであり、かれらのいう國家とはかれらとその近親に外ならなかつた。かれ  
らはおのれの政治生命が終つたときにその地位を後継者に引きつぐことすら氣つた。

前記三人のうち建武前と本音のものとも甚しく乖離するのが唐の太宗で、詳細を拙稿「李神通」  
「唐の太宗」で述べた。

李賀が、唐の太宗を念頭において「秦王飲酒」を作りはじめたとしても、太宗に向ける刃はた  
だちに賀に返つて来ただろう。賀自身、太宗と同じ李氏の血をうけ、太宗のうちに見られる享樂  
への指向性は賀のうちにもあつたはずである。太宗の権力集中に早くから手を貸したのは、賀の

祖先の李神通だった。

神通とその家族が、唐朝成立に盡力しながら太宗から疎外されてゆく過程を前掲拙稿で扱ったが、神通がそれでは人民の幸福を顧ってその力を盡したのかといえは、まずはそうではなく、出世株としての李世民に賭けたにすぎない。かれはその一生では長孫無忌ほどは儲けなかつたにしても、やはり朝廷の元老として死に、唐大冢陵墓にねむり、子孫の數百人が、地位の高下はさまざまながら唐朝の終りまで官吏として生活した。賀もまたその一人だったのだ。

李賀は恐らくそのことを心に耽じ、痛みとしただろう。「感諷五首」「老夫陳玉歌」「藁家洞」などはその耽と痛みから生れたものに違いない。そうして「秦王飲酒」もまた。

「秦王」の對照存在として、堯舜や轉轉聖王を掲げたが、これも今日の史觀からすれば神話にすぎまい。殷周以來、王は人民を收奪するものであり、インドでは國王と盜賊とはほとんど同義語だった。轉輪聖王にしても、佛經の描くその富裕は、象徴性を糾離すれば、人民の勞働力を吸収したもののといふけがあるまい。

唐の長安は國際的な大都市で、そこに住んだ知識人は、前代の人々に較べてはるかに廣大な視野を獲得していた。それが唐代の詩を豊かたものにしてゐるのだ。けれども、その視野から得たものによつておのれの知性と感性とを徹底的に検討しようとした人は、やはり多かつたとはいえない。白居易はたぶんその知識において李賀よりもけるかに諸外國の事情に通じていただろうが、「李夫人」「胡旋女」に示される道德感覺は保守的な中國のオーソドクスで、だからこそ、「七德舞」で太宗讚歌のラップを高だかと吹奏してそれを「諷諭」の基調とし得たのだ。李賀は

白居易の「ハハ諷喻」の基調Vを諷諭の對象とする視點を採らなくてはならぬ。李賀について論文を書く人は、管見ながらまだない。だが、そのことを知っていてサリげなく自作の詩の注に書きとめたと思われる作品をもつ人がいる。「片石集」(一九七八年、北京)の著者趙煥初氏だ。氏は「人民中國」一九八〇年四月號によれば、「中國佛教協會會長代理」の職務をもち、「片石集」は一九五〇年十二月から一九七七年にいたる間の詩詞集、二〇六頁に「讀李賀詩」二〇七頁に「東寺寫句咏李賀」がある。いずれも一九七四年七月作。その前者は

秦王破陣樂 秦王之破陣樂

西域傳殊功<sup>①</sup> 西域 殊功を傳ふ

非頌秦始皇 秦の始皇を頌するに非ず

乃歌唐太宗 乃ち唐の太宗を歌ふ

△秦王飲酒行<sup>②</sup> △秦王飲酒行

意亦指唐廷 意 亦唐廷を指す

李賀作此詩 李賀の此の詩を作れり

刺李非美羸 李を刺して 羸を美むるに非ず

① 玄奘、印度戒日王の所に去く。王問ふ、中國に△秦王破陣樂なる歌舞曲あり。秦王は何人にしてか此の歌咏を致せる。と。答云ふ、即今の中國の天子と。

② 論者、李賀の△秦王飲酒行詩に、秦王騎虎游八極の句あるを以て其の法家たるを定む。

注①の戒日王と玄奘の對話は『新唐書』西域傳・天竺國にも見ゆるが、『新唐書』は三載法師玄奘奉詔譯・大抵持寺沙門辯機撰『大唐西域記』卷第五の羯若鞠闍國の境に據つたものなるが、以下『西域記』からの引用、長くはあるが、必要だと思ふので、水谷真成氏の訳で紹介する。或る落は變更した。

初め「私、玄奘は」拘摩羅王の招待を受けて、摩揭陀國から迦摩縷波國へ出かけていた。折しも戒日王は巡幸してちようと羯若鞠闍國に居た。拘摩羅王共々往つて會見した。戒日王は勞をねぎらつてから、「何れの國よりや」て來られたのですか、問はしようとか」と尋ねた。「大唐國からや」て來ました。佛法を請來しようとしてです」と答えた。王は、「大唐國と何との方角にありますか。通られた道は？」ここから遠いですか」と言うと言て、「ここから東北數萬餘里にあたります。印度で言う摩訶至那國がそれです」と言つた。王は「私がかつて摩訶至那國には秦王という天子が居られると聞きました。若くして不思議な能力をもち、長じては勇武の人であると、前代に動亂が生じ天下は分散し、戦亂が諸方に起つて人々皆苦しんでいた。ところが、秦王天子は早くより遠大に計略をもち大慈悲を興し、衆生を救済して海内を平定され、その教化は遙かまで及び恩澤は遠くまで潤つていて、諸外國も徳化を慕つて臣と稱し従ひ、人民たちはその撫育を受けて、ことごとくの人々が秦王破陣樂を歌つているとのことである。その風雅な舞樂の詠を耳にすること、今日まで久しいものであります。りっぱな徳の名譽はまことにこの上うなものでありましよう。大唐國といふのはこの國のことですか」と尋ねたので、「玄奘は」

「やうです。至那とは以前の主の時の國號で、大唐といふのは我が王朝の國號です。以前まだ即位されぬ時には秦王と言ひ、今けすでに王統を継がれて天子と稱してあります。……威風は四方に及び凶賊たちは戒び、國の四方八方は平穩になり、萬國は朝貢して來ております。……」

折しし戒日王はちやうど曲女城に歸り、法令を取り行なおうとしていた。……九十日を經て曲女城に至つた。「城は」苑カシタス御河の西の瓦味く大きな林の中にあつた。……王はまず河の西に大きな伽藍を建て、伽藍の東に寶臺の高さ百餘尺のものを作り、中には金の佛像の大きさが王の身長ほどのものを安置した。……ここから東北十四、五里の所に、別に行宮を築いた。……王は行宮から一體の金像を引き出す。……戒日王は帝釋天の服をつけ寶蓋を手に執り左に待し、拘摩羅王は梵天王の威儀を整へ白い拂子を手に執り右に待し、それ五百の象軍が鎧をつけ、佛像の前後を取り巻き護衛する。それそれ百の大衆は樂人が乗つて音楽をかき鳴らす。戒日王は眞珠、とりどりの寶や金銀の花を歩むにつれて四方に撒き、三寶は供養をする。まず寶壇に昇り香水を佛像に注ぎ、王自ら背に負つて西の臺の上に戻り屈け……供養する。……食を道め終るといゝるの異學の人を集めて、教義の微意を論定し妙理を宣揚し、日がまさに暮れようとする時「はじめに」行宮に引き返すのである。

このようにして日々金像を送り届け、禮拝すること初めのようにして、終日に至つた。その大臺は突然火を發し、伽藍や門樓は火煙を出して燃えさかした。王は「國賊を盡くして先王の遺善をなさんとて、この伽藍を建て佛の威業を世に明らかにしようとしたのに、我が身の徳薄くして天に祐けられることなく、このよふ災難を蒙つた。「佛の」お誓めの誠がこのようであれば、

どうして生きておられようか」と言い、香を焚き禮拜し、「幸いにして前世の善業のため、諸印度に王となることができました。どうか私の福徳の力をしめて大災を消滅せしめ給え。もしお聞き入れなければ、今この時より命を亡くします」と自ら誓い、すぐさま身を躍らせ門の隙の上に跳び乗った。たつき消すかのように火は盡き遣は消えた。……王は「このでき事から見れば如来のお言葉は眞實である。外道・異學のものたちは常住と法を固執するが、ただ我が大師（佛陀）のみは無常と教えておられた。ところが、私の寄捨がすでに満ち念願が遂げられたのに、この變事に出會って、いよいよ如来の眞實の教えを理解した。このことは大いに喜ぶべきことであり、深く思しむべきことではない」と言った。

(以上)

戒日王の問いに對する玄奘の答之のうち太宗の徳を述べるくだりで王の問いの言葉と重視する部分には省略した。

『西域記』は太宗の詔を奉じて撰述された。太宗が堯舜や轉輪聖王を氣どる人であることは太宗の代の人けみな知っていた。玄奘あるいは辯機がそれを知らないはずはなく、種々の譯業の後援者である太宗には好意をもったであらうから、戒日王の問いが實際は簡單な言葉であつても、玄奘の答之の中の言葉を分かつて王の問いを莊嚴したといふ事情が想像されなくはない。

前引の部分の前に、戒日王の家譜と略傳を載せる。ほとんど轉輪聖王が實現したかの感がある。太宗は佛法を重んじて玄奘を愛顧したのでない、水谷氏が「解説」にいうように「西域・インドの情報提供者としての法師に執着してのことであつたらう」とうてい、戒日王の比ではない。戒日の法會と「秦王飲酒」の夜宴とを並べて見るだけで「李賀作此詩、判李非美蘇」なることは瞭

然であるう。趙氏が「刺客」の李を唐の太宗李世民に限定するか否かは詳かでないが、李世民によつて代表される中國の世俗王一般を指したとすれば、ほとんどわたしの説と同じだ。が臆測は遠慮しておこう。

轉輪聖王は、聖なる王には違いないが、やはり世俗王である。「大智度論」の初品中婆伽婆經論第四にいう。

轉輪聖王は結と相應す、佛は已に結を離る。轉輪聖王は生老病死の泥中に没在す。佛は已に渡るを得たり。轉輪聖王は鬼殺の奴僕なり。佛は已に永く離る。轉輪聖王は世間・曠野・災患に處在す、佛は已に離るるを得たり。轉輪聖王は無明闇中に處在す、佛は第一明中に處る。轉輪聖王もし極め多く四天下を領せんも、佛は無量諸世界を領す。轉輪聖王は賊自在なるも佛は心自在なり。轉輪聖王は天衆を貪求するも、佛は乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで貪著せず。轉輪聖王は他に從つて樂を求む。佛は内心自樂す。

佛と世俗王とはこのように離絶している。佛に對すれば、堯舜もまた世俗王であるとすることが佛教の思想だ。「楞伽經」を讀んだ李蕚は當然それを知つていた。文化人類學などにおける「聖なるもの」と「俗なるもの」とが、佛と轉輪聖王のように離絶するのか、あるいは轉輪聖王のような世俗王でも「聖なるもの」に包含しうるのか、わたしはよくは知らぬが、「秦王飲酒」に描く秦王に聖性を認めることは、李蕚はしなかつたであらう。

「秦王飲酒」を机上で作つたあるとき、李蕚の心事は所詮、推測の域を出ない。筆の手を離れて千百五十年後に對つた「秦王飲酒」は、秦王のみならず、轉輪聖王の神話性をあけき、國家

をはじめとするもろもろの組織の虚妄性を撃ち、また個人の建て前と本音の二重性を切り裂く刃としてわたしたちに迫ってくるように感ぜられる。

李賀をはじめて接した日からの長い年月、「秦王飲酒」を正面から讀み解く努力を怠り、て來たのは、今おぼえ、この刃に對する恐れだったのだろうか。

(一九八〇・四・一四・一六〇五)

注と付けたり

二二頁の「佛教思想を基盤とし作詩した詩人は王維以外に例を見ないと斷言する」のは入谷仙介『王維研究』だ。昭和五十一年發行。七四〇頁。定價一〇〇〇圓。「あとがき」によれば「川環樹先生……から……お言葉がかか……一夏……鐵筋ビルの殺風景な研究室で……洗面所の水道の栓をひねり、流れる水音に溪流のせせらぎを想像して」執筆した「學位論文」で、奥附には「京都大學文學博士」と記す。

「物事を正面から見ないで、裏面から、否定的な形で見ようとする傾向がある」といってそれはそんなに深刻なものでなく、ただそのままなおに言ってしまう、ただではつまらないから、一ひねりひねって見たというまでである」五四頁

王維の作品に對する評語として付的はずれだが、著者の作業に對する總括批評とすれば、びつたりである。

「交流」の原稿「岩波文庫『王維詩集』への問い」をお送りします。取捨はもとよりご自由ですが、不採用ときま、たら、同封のハガキで、そのむねお知らせください。

岩波文庫『王維詩集』への問い  
原田 憲雄

同書は小川環樹・都留春雄・入谷仙介の三氏による選訳で、A解説VによればAこの解説は入谷が担当した。……小川は詩の選定のはじめから、最後まで都留・入谷両者の原稿について全面的な助言を行なった。V

さて、A解説Vには次のようにいう。

選集としては岩波書店の「中国詩人選集」一集巻六「王維」(都留春雄)と、集英社の漢詩大系巻十「王維」(小林太市郎・原田憲雄)とがある。……漢詩大系は、小林氏が三分の一ほどを終えた段階で死去され、原田氏が後を承けたもので、小林氏の部分がことに創見に富んでいるが、奇矯にわたる説も多く、注意を要する。

同書の第一刷発行は一九七二年である。その九月に私は「月支頭上王維札記」を書き、再校のとき同書を読んだので、次の「付記」を加え、掲載誌の抜別を入谷氏に送った。

十月十六日……『王維詩集』(岩波文庫)が刊行された。……同書の「解説」で、入谷氏は漢詩大系『王維』(小林太市郎・原田憲雄)に触れ、A小林氏の部分がことに創見に富んでいるが、奇矯にわたる説も多く、注意を要する。Vと評された。「奇矯にわたる説」がどれであるかを列挙し、そのおのおのに対する氏の確正の説を提示されるならば幸いである。

氏はこれに対し、近く刊行の『王維研究』を読めばわかるだろう、という意味のハガキ一

を返しただけで、今日にいたるまで、私の問いにまともに答えていない。

氏の『王維研究』は一九七六年三月に刊行された。その言葉によれば、ハ王維を専攻することにした私は、故小林太市郎博士の「王維の生涯」を、手びきとして読みはじめ<sup>六九五頁</sup>ハ小林博士の西陣のお宅へも足を運んで教乞を乞いつつ、書きすすめた<sup>四頁</sup>もので、その初る王維系の本底は、博士が入まず注目された<sup>一四頁</sup>ハ夏麻沙宋本、ハ研究書としては故小林太市郎博士「王維の生涯と藝術」が唯一のもの<sup>一四頁</sup>でハことに傳記研究は詳密で、本稿もそれに負う所が多い。<sup>一四頁</sup>ハ同頁のである。

同書が博士の名を挙げるのは三〇ヶ所で他の人に<sup>四</sup>抽<sup>五</sup>んずる。そのうち博士の説を<sup>一</sup>き<sup>二</sup>り<sup>三</sup>否<sup>四</sup>定<sup>五</sup>するの<sup>六</sup>は<sup>七</sup>ニ<sup>八</sup>ヶ<sup>九</sup>所。そのひとつは二三頁、王維の濟州左遷に關わるハ事件の時期についての思いが<sup>一〇</sup>い<sup>一一</sup>。そのふたつは六四の頁、善興寺のハ所在<sup>一二</sup>を<sup>一三</sup>博士が洛陽と見るの<sup>一四</sup>に<sup>一五</sup>対<sup>一六</sup>し<sup>一七</sup>氏が長安とするハ<sup>一八</sup>思<sup>一九</sup>い<sup>二〇</sup>ぢ<sup>二一</sup>が<sup>二二</sup>い<sup>二三</sup>は『王維の生涯と藝術』においてであつたが博士は漢詩大系で既に訂正しておられる。

氏は、一六三、一四三、二三三、二四四、五五二、五八二頁の六ヶ所で、博士の説に従ふといっているが、サキのハ所在<sup>一</sup>を<sup>二</sup>博士と同様、推測であり、推測の根拠として挙げるものも確實にして充分といえるものではない。

他はすべて博士の説にハ従<sup>一</sup>つて<sup>二</sup>い<sup>三</sup>う<sup>四</sup>る。

原田の名を挙げるのは四ヶ所、うち否定的なのはニヶ所である。そのひとつは二一九頁で、「雙華詩歌」につきハ原田憲雄氏はこの詩を愛人との別れの詩と断定する<sup>一</sup>。氏は別の推測を

展開する。そのふたつは二三七頁で、「使至塞上」詩に「き、その第一句を私が『文苑英華』に従つて「銜命辭天闕」とするのがよいだろうとするのに対し、氏は「私はやはり單車魯國の形の方がよりすぐれていると思う」と述べる。

私は「雙黃歌」での別れの相手を「愛する女性だったのである」といった、「である」とは日本語では推量の語で、断定の語ではない。この詩は樂府で、樂府は虚構を許容する文体だから、私は「読者はここに想像力のすべてを投じてよい。投ずることを作者はひそかに望んでいるのである」という観点に立ち、推量をくりひらげたのだ。

「使至塞上」は樂府ではなく、題が示すように記録的性格をもつ作だから、私はその事実性を重んじた。

「奇矯」の語を、手許の字書は「風がわり」と訳し「人と異つた言行」と解く。中国でも日本でも、褒めるよりは貶す方向で使用するのが普通であり、入谷氏の文脈でも「割見」Vに對置するから、貶辞と取るのが自然である。

氏の文章は、その中の「奇矯」が小林博士に繋がるのか、原田に繋がるのか、両方にあわせて繋がるのかが断定しにくい。藤麻文章である。いずれにしても、氏の指示した『王維研究』で見ることが多い。小林博士の説も原田の説も、教ヶ所で氏の説と異なるだけで、その相違を決定的に打破し存在を許さぬようにするほどの根拠を氏は提出していない。ひとことでは見解の相違にすぎない。

違つた見解をもつ者に対して「奇矯」にわたる説が多く、注意を要するVというのは、もとより

自由だけれども、それは批評ではなく、無責任な放言だ。

△多い▽か少いかは相対的な語で、主観の介入によってどちらにもずれうるが、三の中の二、三ないし七、八をあげて△多い▽というのは尋常ではない、ひとが断定してもせぬ言葉を△断定する▽と断定するのは、公平ではない。というより、氏に日本語をまともに読む能力があるのかどうかといった疑問が生じる。日本語をまともに読めない人だとすれば、そんな人を相手にとやかく言うことはない。

△谷氏の原稿について△全面的な助言を行なつた▽小川氏は、言語学者として令名ある人だが、この△解説▽を△△奇矯▽ではない正常なものとして許されたのだろうか。

岩波書店は、出版物の校正にことに厳密で、問題のあるところは、内容表現ともに、執筆者に徹底的にダメ押しする。と聞いている。この△解説▽についても問いただした上で、この『王維詩集』を『万人の必読すべき真に古典的価値ある書』と見きわめ『文庫』に収めたのであるのか、あるいは私の耳にした評判は誤伝だったのでらうか。(一九八〇・三・三一)

一九八〇年三月五日一七・三〇、岩波書店の「函書」の係りの「アサミ」という人から電話があり、「岩波文庫『王維詩集』への問い」は「交流」欄には掲載できないが、文庫の係りと『王維詩集』の選訳者には回覧するから、冷の行うから、なにぶんのお便りをいたしましたし、どうのとであった。その人の言葉は質実な感じだ、だから、言ったことは行なわれたものと信じるが、岩波文庫の係りからも『王維詩集』の選訳者からも、今もってき沙汰なしである。

## 二〇世紀の李賀 (九)

草森 紳 一

一九六五年雑誌『現代詩手帖』九月号に「垂柳の客―李長吉伝」(1)が出た。筆者は草森紳一。一九六六年十一月までに十四回で一部が了り、一九七〇年一月から第二部がはじまり、一九七五年十一月までに三十八回で、以後はとぎれてはいるが、側聞するところでは、近ごろ別の雑誌に続きを掲載しつつある由。二部の三十八回までで、四〇〇字一五〇〇枚ぐらいだろう。わたしは、この未曾有の李長吉伝が完成したときに取りあげようと思っていたが、完成するまでいられるかどうかかわからず、いるとしても紹介する気力が残っているかどうかわからぬ。もっともそのころは、わたしを紹介したり批評しなくても草森李長吉伝の方が人々に親しくなっているだろうが。

江戸の外では秋の虫がやけくそに鳴きまわっている。勢いのよい響きとして耳に受けとめるゆえに、かえって部屋の中の灯が、薄く感じられる李賀V 「昌谷読書示巴童」詩中の「垂柳の客」を總題に選ぶところに、この「長吉伝」の性格が暗示され、その詩の初句「虫響灯光薄」を前引のように読くと、そこにかれの読詩の視線の傾向がけのめいている。「巴童答」についてハ巴童の気持になって李賀がかわりに答えてやるのだ。いや李賀は、巴童の心などはどうでもよいのだ。自らの心を吐くのに巴童の答を設定するのだ。巴童をだにした自己問答なのであるVという。

おそらくこの言葉を草森紳一の作業の總括批評に当て得るだろう。草森紳一にかぎらず、人は何を語っても「何」をだしにして自己を語っているので、自己しか語れないのだ」とはいえ、自己を語るためには、自己以外のものについて語るほかない矛盾が自己というものらしく、それを嗅ぎあてて、己れを語るに不可欠とわらい定めた李蒼をだしにして語りはじめたのが『垂如の客』李長吉伝』なのだ。

人間は死の瞬間まで呼吸を続けるにもかかわらず、その人間が生きる瞬間というものは、場面のの上に立った時だけである。シーンとは、人間がはじめて時間をだき（むこうみずなことだが）意識し、空間を埋める時なのだ。そのシーンは、彼の想像力の爆発した時に構成されるだろう。シーンをもたない人間、すなわち風景のない人間には、時間はないのだ。

この「場面」「シーン」という術語は重要だ。

入大学も終りごろ、いったい自分は、なにを一番やりたいのか、わからなくなり、なにが一つに絞りこもう絞りこもうとしても、かえって私の興味は、増幅していくばかりだった。Vカレは、『狼藉集』のあとがきにあたる「魚座の弁解」という文章でいう、入卒業の年、東映の入社試験を受けたのだが、学科はどういうわけか、コーネル・ワールリッチについて記せ、などまるで自分のために出たような問題ばかりで、手ごたえがあって、果して二番か三番で合格していたのだが、しかし面接試験は、さんざんであった。故大川社長に、君が入ったら、なにをやりたいかわかると言われて、正直に演出・脚本・プロデュースの三つを志望すると、あがりっはなしの声で答えたら、とたんに彼が心証を悪くしたのか、そんな一人下たくさんできるものではない、と不愉快

快そうで声で言い、それ以後の姿は、たがいに反戻しあいとなった。いまのかれからは、あがりっぱなしの声で答える姿は想像しにくいだろうが、一九六〇年代のはじめごろ、初めて会ったときのかれには、たしかにそんな姿があった。入社試験に不合格となったかれは、この苦しい経験から、専門一筋の人間に切りかえたかと言えは、そうではなく、自分のやりたいことは、臆面もなくなんでもやろうということであった。母校の慶応大学の助手、講師も短期間つとめたが、雑誌の編集者を経てフリーライターになる。かれの書く文章は、あるとき「マンガ評論家」あるとき「美術批評家」あるときは「ジャズ評論家」……という「肩書」が与えられる。だが、私には、専門を多岐にこなしているのではなく、たかが文章にのみこだわっているにすぎない。私の方をきこうと、すべては「私」に収斂されているのであり、不器用といえは、これほど不器用はないのであり、専門の専門にしがみついている人間のほうが、よっぽど器用に見える。

李賀という詩人の形成に、この事件が必須であったように、草森紳一という李賀運作者の形成には、東映入社試験不合格はこの上ない好条件だったといえるかもしれぬ。私詩法のための詩法としてではなく、李賀という人間の心理と不幸のメカニズムが詩法をさす左右していることをみなくてはなるまい。私という視座を獲得したのは、苦しい経験から、己を切りかえるのではなく、臆面もなく、己にこだわろうとすることによってであった。こういう人、不器用さ、私がなくてはなかなかの胸のうちを聞いてくれないのが李賀だ。

李賀だけがそうなのではない。猫だって、石ころだって、胸のうちは開かぬのだ。  
日本の知識人は、外国の最新式の思想に、すぐとびつくし、すぐに紹介解説する。また、み